

香川明善短大 秋山照子

目的 香川県下の近世・近代の食構造を古記録を資料として調査する。

方法 現・三豊郡山本町河内の大喜多家に現存する仏事関係古記録(明治38年～昭和30年の約50年間)から82献立を抽出、分類し、本報では主に献立構成を中心に検討する。

結果 (1) 仏事は宵越しで施行されることが多く、献立構成は下記のようなものである。

前日	{	A + B + C パターン	※ A・入込、茶漬 = 平皿・皿	B・非時 = 本膳
			C・会席 = 吸物2・肴7～吸物1・肴4	
後日	{	A + B + C パターン	※ A・小喰 = 汁・平皿・小鉢	B・斎 = 本膳・二ノ膳
		A + B パターン	C・会席、精進落 = 吸物2・肴9～吸物1・肴1	

前日では、A + B + C パターン・72.7% とほぼ一定しているが、後日では A + B + C パターン 42.4%、A + B パターン・30.3% に分かれ、C(会席、精進落)の加わる A + B + C パターンは昭和期に定着するなど、時代による変化がみられる。(2) 献立構成の階級差は献立の品数において顕著である。(3) 献立構成は前・後両日共に、前報までの他地域との類似項が多い。但し、献立用語には入込(イリコミ)、置合、改敷、箱など独得の用語があり、地域性がみられる。(4) 酒肴の部は前後両日共に、大正期以降、會席の名称が用いられる。會席における供食形態はそれ以前の井、鉢などによる全体単位から、銘々の皿などによる個単位へと推移する。又、後日の會席では精進落が用いられ動物性食品の使用がみられる。(5) 献立構成は昭和19年以降、パターンが崩れ、簡略化の傾向が顕著である。